第２組願念寺住職　伊東唯昭

　昔から「子どもは親の背中を見て育つ」と言われています。この言葉は、何時の時代にも当てはまるものです。私は数年前まで教員をしていましたが、その通りだと思うことがありました。例えば、「先生の話をしっかり聞きなさい」と我が子に言いながら、授業参観で自分たちが話に夢中になる保護者の姿。自分自身が見本となる姿を見せなければ我が子には通じません。それが分からない親（保護者）の姿がよく見掛けられる昨今です。

　ご門徒宅でのお常飯（月参り）や年忌法要等でも、前に述べた言葉が当てはまる事があります。お内仏（お仏壇）の前でお勤めを始める前に、家族に声を掛けてみんなでお参りする家庭の子どもは、進んでお内仏（お仏壇）に手を合わせます。また、頂き物や大切な物を、最初に「まず仏様に」と言ってお内仏（お仏壇）に供えます。祖父母はそんな子どもの姿を見て「本当に有難い」と喜ばれます。

　そんな子どもの姿や行動で話が盛り上がる中、両親や祖父母に手を引かれお寺にお参りをし、お勤めや法話を聞いたことやお斎（とき）をおよばれしたこと等、自分の幼少時の話がよく出てきます。随分前の事なのでしょうが、お寺にお参りすることの大切さを教えてくださった親の姿がありました。しかし、最近はお寺の行事へのお参りも少なくなってきました。ましてや子ども連れのお参りはほとんどありません。そんな中で真宗にはお常飯（月参り）という寺とご門徒をつなぐ習慣があります。そのことを僧侶は、毎日生活に追われている現代人にアピールしていかなければならないと思います。そこでお経のことや家族のこと、仏壇のこと、真宗の教えのこと等を気楽に話し合っていくことが信心の再認識になると思います。そして私たち僧侶は、日頃から「背中を見られている」ことを肝に銘じながら生きていくことが肝心ではないかと思うようになりました。